

育児ログを用いたジェンダー役割意識の変容に向けた  
クラウドアプリケーションの開発

A Development of Cloud System Applications for Change of Gender Roles  
Using the Childcare Data

清水 貴文 †

渡邊 宏尚 †

土田 葉 †

皆月 昭則 †

Takafumi Shimizu

Hirotaka Watanabe

Shiori Tsuchida

Akinori Minazuki

## 1. はじめに

「男は仕事、女は家庭」という我が国のジェンダー役割分業解消に向け、さまざまな方面で近年の女性の社会進出が起きている[1]。一方で、依然として男性の家事・育児参加の積極さが欠けており、男女共同を妨げている。厚生労働省の調査によると、6歳未満児がいる世帯における1日当たりの育児関連時間は女性が3時間9分に対し、男性は33分と非常に短い[2]。他の先進諸外国と比べても、男性の平均育児時間は3倍以上の差がある[3]。その時間差以上に、家事を併用する女性への育児の負担は、大きくなっていることに気づく必要がある。日中に外で仕事をする男性側は、家事成果(掃除・洗濯・夕食の準備等)は有形であるため帰宅後に気づく事は可能であるが、育児における成果(授乳・おむつ交換・抱っこ・寝かしつけ等)については、無形であるため男性側に気づかれにくい。家族内の家事・育児の側面には、有形・無形のケアワークが含まれ、長い期間、我が国では、両者の役割分担にジェンダー・バイアスが潜む。男女共同参画社会を実現するためには、育児負担など無形な成果を評価することが必要である[4]。

### 1.1 育児意識変容の重要性

ある世論調査において「男性が家事や子育てに参画するために必要なこと」として、「夫婦間でのコミュニケーション」や「男性自身の家事育児に参加する抵抗感をなくす」ことを必要とする回答が多い[5]。父親の育児参加によって子や夫婦関係に与えられるポジティブな影響も多く認められており[6]、次世代を育成することの幸福・満足感に気づかせ共有することが、より健全な育児環境を支援する[7]。男性が今すぐ直ちに育児に参加・参画するのは困難である。

まずは女性の育児負担を理解し、育児に寄り添う姿勢を持つことが今後の育児参加のキーになるであろう。本研究では、夕方には無形になっている育児のケアワーキング成果を記録共有するアプリケーションを開発した。育児活動データを保存し、データを男性と共有することにより、男性が日々の育児負担に気づき、目を向け積極的参加をうながすことを期待し、同時に、育児参加に対する社会的意識変容のためのきっかけとなるプロジェクトで配付検証した。

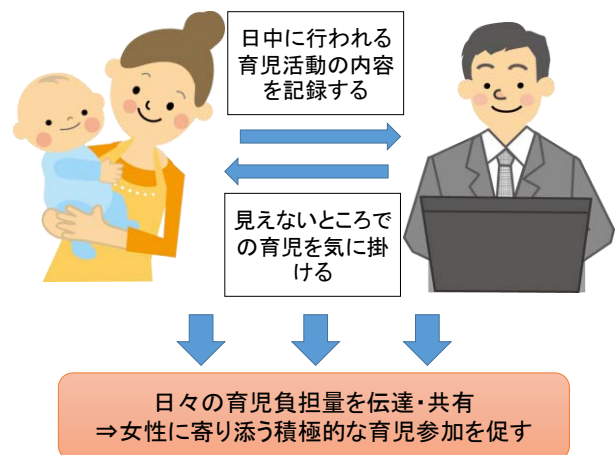


図1 本研究における開発目的の概要

## 2. アプリケーションの処理構造

本アプリケーションシステムは、Android OS 対応スマートフォン及びタブレット端末での使用が可能になるよう開発した。以下にシステムチャートを図示する[図2]。

† 釧路公立大学 Kushiro Public University

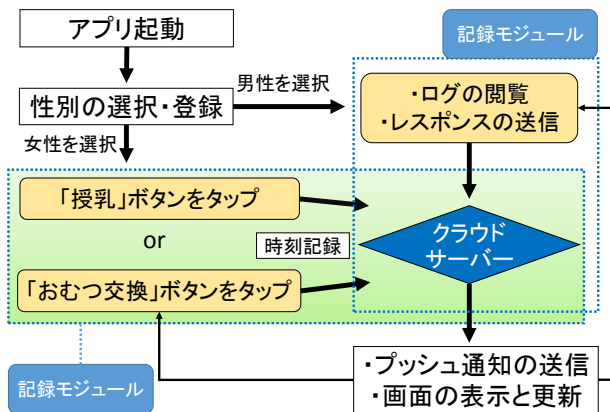


図2 アプリケーションの処理フローチャート



図3 アプリケーション ver.1 画面

## 2.1 システムの詳細

アプリ画面には「授乳した時間」を記録するボタンと、「おむつを交換した時間」を記録するボタンを実装し、育児活動成果を記録したい場合に、各ボタンをタップすることでケアワーク活動別に記録が保存、及び画面上に確認表示される。ケアワークカテゴリーは特に、負担が大きい2項目に選定し、記録閲覧とインターフェース操作をシンプルでわかりやすく実装した。また、育児ログの既読有無を伝えることで、育児負担を慰労し評価するため、既読時のレスポンスメッセージ機能も実装した。

## 2.2 クラウドシステム機能

本アプリケーションでは、記録したデータをクラウドサーバーに保存し、リアルタイムでお互いの保存データをリストビューに表示・更新する機能を有している。ボタンをタップするとクラウドサーバーを介して、相手にプッシュ通知が送信される。これによりログの更新に気づくことが可能であり、情報共有の円滑化が期待される。

## 3. 検証方法

6歳未満児がいる世帯を対象にアプリケーションの機能評価をした。図3のアプリケーションは、GooglePlay公開配布や「KODO プロジェクト」の支援を受けて実施した。機能評価では世帯訪問して面接法を実施するなど男性側・女性側の家事・育児意識に関する調査を実施した。

## 3.1 結果

検証結果は学会登壇時に発表する。

## 4. おわりに

育児参加・参画を果たすプロセスとして、育児意識を变容させるプロセスは重要である。本研究の支援は、育児参加の気づきを支援するものである。日常において育児成果など無形なケアワークに気づき感謝することは、健やかな育児環境と男女共同参画のプロセスになる。

## 参考文献

- [1] 船橋恵子, “育児のジェンダー・ポリティクス” 勁草書房(2006)
- [2] 厚生労働省, “イクメンプロジェクト” 参考資料(2012) [http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/ikumen\\_shiryou/dl/ikumen\\_sankou\\_01.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/ikumen_shiryou/dl/ikumen_sankou_01.pdf)
- [3] 内閣府男女共同参画局”男女共同参画白書(概要版)”(2007)[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h19/gaiyou/html/honpen/chap01\\_00\\_02.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h19/gaiyou/html/honpen/chap01_00_02.html)
- [4] 下夷 美幸, “育児における男女共同参画 — 私的領域のジェンダー変革に向けた家族政策の検討” (2007) <http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/oz/547/547-02.pdf>
- [5] 内閣府, “男女共同参画社会に関する世論調査” (2012) <http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-danjo/2-2.html>
- [6] 石井ツク昌子, “「育メン」現象の社会学” ミネルヴァ書房(2013)
- [7] 北野幸子・立石宏昭, “子育て支援のすすめ 施設・家庭・地域を結ぶ” ミネルヴァ書房(2006)